病家示訓　完

十武9
983

序
私儀醫學なども不仕あるこの
おとく文盲なる者にて清庵
然るを幼年より病身にて京
田舎の名醫方へまゝ治法をへて
し其治療によりて息災となり名
醫達の治術指授少々耳よとてあり

かゝし紀州藪人(くすし)よりハ海し
うと人も存ず由人一門親類又ハ
懇意のあるよ病人ハ度ゝ治ハ是
非私にお様を殺し醫者元へも
致すと之れまじと病人あつ支配人
の指よ申ゆ事元三十年ほど
治とも存る被是と病人

叔何かうひ申用所ハ何まゝさ
れ御醫者元治療治の手前
をも見及び申私よ御醫者を
忽了み申しよ付ていはすく
了簡なりがたきうれはんせ世間
諸病中ほど患の病人ハ度ゝ
附ハ醫者元一ヶ人を治うて里

くも快事を見てしるて病作六
ケ敷おえしけ時慈悲の薬中
中より里お続おけよ面にも
行作とひいきこ乃方へ若器だ
或ハ義なるひと人へかなる人を
醫者のあつい若器難殺として多
かよ律の終けまと有く維

浄一かよいをにもけ路を病家
より對し真實といひ申がくし
然たる難計事いて留あまりが
たまとるよけ給へあそれ為て
此一冊統にのりつて推察ある
試書記浄お絵此相手と被減
けて簡けおくへまけ此番に書裁

能なるかゆへ須よしや中にハ
なくハ病者の無益と殺気ある
上手成る習をふく人あれとも病
家乃ためにもて無益と自ら此
不調法をもなく利見須希事
を書写し能もの也万一世乃為病
家醫者ともなりて婦女の重寶とも

ならバ私願寔加なう尊事と
所希也

正徳癸巳之年春

洛下隠士書

病家示訓目録

本朝医術伝来の事

医者学不学の事

療治の上手不上手補瀉手癖あるの事

療治の風をあぐはゞ度　凡七條

病家惣体乃心得の事　凡十九條

疎じや疱瘡防ぐんはのです

疱瘡示訓

本朝醫術傳来して

本朝醫者の元祖ハ神代大己貴命

少彦名命の二神よりはじめ

今乃五條天神ハ即少彦名命也

御鎮座なりそれ法術を傳へ上古

のまゝなれバ今より傳り得らしに

中古欽明天皇の御宇百済国より医博士并に採薬師を我朝に貢す故朝にも亦医術名医の人相続く医博士典薬頭に備り殊に中古に於て和気清麿其子和気広世とて世人に名ある妙を顕し子孫相続て医の名家なり

又丹波康頼とて名医出給ひけり殊に和気丹波の両家を以て代々典薬頭に備ふ広世は薬経太素と申書を撰ひ康頼は医心方と申書を著す其外菅原岑嗣か金蘭方五十巻安倍真貞乃大同類聚方百巻出雲広貞の難経開委細川

撰えの霊蘭集皆名ある書之又朝
野群載をみれバ本朝の昔百済の医
生風疾を療く我朝の医師丹波雅
忠を求め迎へらるゝものよ朝庭儀候
なりくはるゝものありしに於て百
済へ返翰の中に雙鳧猶難遠鳳池
之月鶴鷺何得入雞林之雲の句あ

是等の事実を考ふるに我朝の名
医にさがりしバ代々の名医世々
撰せし所の書籍ゝを数多しといへども
家々の秘伝として他に出さゞる
ゆゑ其内の家お続かずして
断絶するもあり或ハ火難に
かゝりて焼亡すばもかく

一書とともに傳ふるもの僞さ
といふも無き事なりいま
までなしに奇妙とする和方れ
薬ハ其書傳はりしといへども薬
方乃まゝにして傳へ来り本法
の秘は志る法を人に日本流義
醫者ハ先ハ有さがら傳ふるの

ありしおもき事中は醫者の衰微（すいび）よ
りて脈をとり病症を見て療
治をも得人もなく家々小薬方を
もちまおのれしらぬ人々何れ病
よい何といふ薬がよきなどゝ田
舎の妙薬醫者のごとくなり給
しくもの法に寛正天文（くわんしやうてんぶん）の間り

武州河越の導道諱ハ三喜といふ
人大明へわたりて十二年の間彼国
にありて醫術を学び日本に帰りて
名醫となりぬ其弟子に彼名高き
道三といふ人出てきてこれより
漸く世上に医術広く弘まりぬ
此家三代相続て道三と称す始

めを一渓道三といふ是ハ三のはじめ也
其次ハ玄朔其次ハ玄鑑皆道三と
号す此家の門流天下に弥倫く
上ハ王より下万民の脈をとり病症を
考て薬を合せ醫者の一体備れハ
此家よりぞ備はりつ其後これ
家より玄冶法印と申名醫あれ

一家乃醫術ばなしいはずもあれども
以前までの医術ハ東垣丹
溪の書よりかつぎてよく療治なしたる
萬病回春醫学正傳乃ころなりき
後大坂の見宜醫学入門によりて
人参をてうかにおもくハ甚後薛己
が十六種はじめて渡つて林市之丞

といふ人此書をうつして人参を多
く用ゆる事代住ぞろく日本薛己
流乃祖なり今時いふ根の藪医者
とそれも此よし多く人参をつ
かふハ前ふしをよはじめてりこの
時より類経といふて素問霊
枢の註しくすみ治を閲讀

東庵と申人此於ふとりて素問
の講尺を始られ今に至まで
日本醫書讀といふハ皆東庵が
末流也東庵以前ハ素問霊樞ハ
書ハありけれどもよむ人ハなかり
しなり其後名古屋玄醫と
申人程応旄喩嘉言等が書を

よミてこゝろから仲景流を称し
て附子をさかんに行ひはじめられ
し也それより進て律巳によく
附子をもとよりつかハれしまた
玄醫以来もつはら附子ハ流行ひ覚
しに時大坂に小山寿安と申人
ありて大博學の人にて醫術比像

既にくはしき人々ありて此附らに
ちかく世乃名ある医君に
かぞふるに山脇道作長沢道寿武
城に於てハ井実玄碩竹中通庵
其外呉雲子乃門人名医多し
といへ人も市しを去醫ハ療治共
風雅数寄乃機會によりがた

人なれバ不便く別事に託し
信濃醫道乃道統をいぬよはら
まで帝しを去醫寿安此三人是
あまく月本此医者流まさいしく
向上不るわ無芸乃也一を療治共
上手い十口におよむず医者乃
よあらバ異事致細縁い只

古人は世にありし名を傳へまた日本に
医術中比断絶し傳りざりし
事ひさしくありしを加へなしおかう
ありしハいかゞとや
道三家の外竹田吉田久志本
板坂上池院又半井瑞策ハ
和氣乃末孫正親町院御宇

に院乃号を給はりて通仙院
驢庵（ろあん）と號し又施薬院ハ和氣
丹波のはじまり代々有て天正年中
豊臣秀吉公江州乃全宗といふ
名医をまねきて施薬院とせらる名
其外名家多しといへとも茲にこれを以て中
古よりいふ所ハ天下此流多きをもってなし

又療術も大抵凡二品とおなし
き出來及ぬらしき事ハ志ろ
ど狩彼目を後にものゝ
醫者學不学のこと
なれ人回く日と時世上の醫者
学問致さるゆゑしく療治せん
あとも輕きに又無学の医者も

おも驗あり療治乃驗なりたし八
學問も療治に益なきまゝ氣や
譽く日是ぞ乃不審なり医者
相ゝに如く肝心なる處湯藥細
ろ簡とを加如ときへ取なりますり
医者に於て不学にて〻療治
ならぬ為ぞうら事ハ必然なる

程なり然ば学問の名あるべく
療治のみにて雖なきハ学問ハ
無益なりしれ也人と云ふ無益なり
しきことい小兒醫学を法とせ
とい人も肝要乃所へ眼をつけず
其筆の所よ月日を費し古
人療術ハ無味戯も然よなら

されバ廣きく書をよみて醫書ハ
讀得ても己にてすにせうるく
知れども只隣の宝をかぞ
婦るがごとく今日療治乃為
にいかも無く候か様の医者を
用不用にハよく学問志有りと
おもひなく学問好名なれども

本道ハ本法乃学問とハいふまでもなし
けれバ畢竟學向せぬと同じ
ことなり其方にて不實なしく學
問乃名高きしるく療治乃働
きハ此教の医者なり本法乃
学問とせハ何ながら書物を多
く見ずバあるべからず又よき

てよきふミハわづか一部の書一
冊のなかにても千萬の眼を
とくと我心に鍛錬し古人の
意味を能合点し病人にのぞ
む時日比学びし所の理自由自
在に働き一貼の薬も我器量
より調合すべきを学問ある医者と

ゆゑありし事ハ平生学問する時に
心がけ各別ちがふ事なるゆゑなり
心がけなきものはくるしくまなび
くろうづらうも学問志よりとお
もひたちゆゑハ百代能学者と
名を揚ることも是ハ学問といふも
のにいはゞ浅拙文無学の医者

乃療治を志すおしなる事
是不審成るにかくして仮名
本の医書なども有れバはや
りのおり療治ハなりぬらなき之
持まき不埒繁儀敷まず世盛く
の医者よかるもの全廃
表此方よりもたた乃月むてかの類

まよりをあげ候て軽き病ハ
誰をいれずして直よとて不学なる
医者ふ油断せ初発を任せそこな
ひ大病になす事多し仏神どもを
忘ぞことなひハあちこち数を
にくくもなき経ぞ世の祠法などを
務めり事なされ其悪しくして一切の

病ハ初発を任せぬことなく只よ
大病となる治も大病ふなりてハ
医者ざんまいも詮なき事
多しかりそめの病軽き病にも
医者をえらみわかちて不学無
医者をたのむまじき也　又回て
日医者学問なりとも病功を

気の働きをうけまだ然らしことぞ
めり昔て日病功をなくて多
もぬもの気に働こそハ直に学問
の事之働きなきき学問と
いぬもれふとなしも手まこまみて
をやくよたく畢竟学問とハ勧
乃みの働とハ学問我りの也学問なく

てく働といふハ皆推学我てんてふと
中らの之三度まで一度ハ惑おり
けるもけけへ入れと一度ハ仕様
ト此程お嫁なきさるか世やうく
学問の中にも重もに残くてなきを
まじ然ん乃働きにしくハなしとぞ
学問けりく異上ふるく病功なき

いふは我心なりたとへ学問はよく
なりとも仁なき医者は仁
をもつぱら仕ひ又学問ありて
しかも病人数多く見て病功
ありとも医者何程やくにたゝず
そのこゝろなくば病功を積ても
元来学問の根がなければ病人

数多く見たれども決してよく下手
なるものはもとより智者の了簡医
者をさへ嫌ふの程をとがめ
療治にも得手不得手修行にも
ある癖何ゝ何て
医者の得手不得手あるゆへの垂
ある得手不得手何ゝがごとくたとへば

堂塔伽藍を手ま入恰好乃こゝろ所
なきようハ大工了簡寄なは普
請をさせてくるしからぬのふまれ
ざるゝところなりけり書院数寄
屋乃大工に堂塔建なさするな
あり或ハ荒普請古屋ぞて大名
の請元普請城構なくれ至て而く

の好手不好手ありけり医者も又随
まて此病よくなる病もしまたも彼
病ハ不好手なる所ありけり彼病よ
不調法ありくとも此病ハ不好なる
なるありけり病此ハいろ〳〵多き
もあるなれハ平生其医者此好手
不好手をも考中る肝要也さて又

補薬はかろしと瀉薬つよしとさる薬
はかりしと温薬はかりしとの手癖
あるゆゑにそれ医者にもくば補瀉
づる病は補ひ瀉すべきことは深し
難邪の病にはさむき薬を用ひ
さむ冷なる病には温薬を用ひいづ
れも偏なく其の根本はいたりて難き

薬のかりかこともしるまでも常の手
癖(くせ)ありて補薬はかり用ひるは
何病も虚症とのみ見えて自然
あやまりに大実症の者に瀉薬を
一二貼もちゐれども噤(むせ)にさかるん危
しく既に補薬になを続けさまにゝ
まゝ瀉薬つかひの目からいは何を

見くして邪氣がつよきことを見て
有せずして補藥がきらひもなく
またいつぬ至極虚症と見極
ても補藥ばかり中へ是非一味か二
味瀉藥をまぜ給ひなしぬやうに
ある分寒藥つかひ温藥はつかひを
さゆまとよおあいすかくこう思

乃流義とてすくなきいぬともあれ
さらく南重がまろきさしも人
補藥にもかくしもう瀉藥にと
かくようだ中をぬけりと自分に
おもふがそれだに其れが至よろしきせと
ありく諸數の醫者此藥いり
とくも同服膏藥そりまけ極

まて急におこたらねば重くなり
是は瀉せねばならぬ病なるを
とくとくして補ひおる思甚内
ふ病人はしはまりくまれつ
本しうまゐ振よりさけ仕舞どうやう
よいやうふるくなるいまくせ之志う
此人は常に瀉薬ばかり補薬すゝむ

寒薬ばて又補薬すゝむる肉服
膏薬なといふものをよく考へ
まず其病人と考合て療治を
すつるもの也又此比世上にふく
瀉薬と寒薬といふ人あるゆへを
合点して瀉薬寒薬をもちゆ
ゞうり温補せん剤なるといふ沖に

まんさはなきやうじ術業ござらひせん
取にくゝハ志して術業をとらせ
なぶらう軽き業術をとすれども
いぬ覚しも多婦しきされまなす
醫者療治の風さ面く有す
○一派ありずんとせいしんなりは
壱医学四氏よわありく道三代

醫方明鑑と全九集をあらゆ可り
岩くく律萃療治傳しき
此流萃敗毒散正気散三和散
五積散などとを能きうひ覚て至
極の術業しいぬが術中益気湯
なりと人参をとう用ひるくハ気遠
小ハなはまのいうと気きをきうろく

死ぬる者にも附子ハのまさせ此
類の医者抔よりハ少し田舎乃
多きものなり都よりなりても
見るを見まねに人参までいつ
も今に多く見ゆれハ下手らしく
ことなれども其るよ又もんど功
者多きを学ぶかる一隙（がい）に見んと

おさてるうつき
○一流ある里假令（たとひ）何ハなりてもよい
なくとも学問ハ外乃かざり抔
まぐくにして整然此上みゆる
百二十方（衆方規矩原本）乃偽授をたくされ
ぶらふ療治抔たくさん此医案ハ
もちひまで至極仕覚へおろひあは

まれなる事は療義なれどもあり
まれに手をくだす流義なりしが此家
の仕人よ労咳を縁毒散ふくす
るのし又敗毒散十味神湯にて汗
の発せぬ時は正気散一貼で大分
に汗を発する事するなり是非
おゝ未だからくいりふくくも此数の

療治をせらる第一あまがゆるさざる
ありままりてにあるはまとさば
ぬはやうにんゆくいぶく翻ば
ねんともかよおるし
○二家あり藤氏李士材が書并
をとぞう王宇泰が證治準縄なと
便覧し祥にかるすいねまへ赤みう

玄珠をおびるゝ先ハ猫茶をたつとミ
風りうにけがれずハ極よせろう
おもき是と思の術醫者しく耐なる
ミ病中大名ハ御扶持人医者大
くし其風乃療治せさる白ふじ所
上つかさより八し免よい病れ披
持のといふ人大方は風俗医者へ

療治をと頼ミ無くおまさ極意多
るゆへ私ハ案和従あらくしまづ
始めと申よう里外なし其子細ハ
ありくに見候すまあらさ
事ハおぼつかなし只心ろうを
山なかたより申をし然ざも大病
よきよび此風俗の医者衆を

たのむハ数人(いくたり)のくすりも用ひず薬
をもちひる事覚え一味か二味なん
遠にくらべての不為は覚も
詳究あすくかゝる事ハ侮る
変症ハ同じにあらずも毀ハ世を
の人且ほんのけく窺(きき)掌(つまやう)なる医者(いしや)
をもてあそぶ太だ此病に及ばざるが

いりがたくなれば治しがたし
○一流あり偏(ひとへ)に温(うん)補(ぽ)の剤(ざい)をこのみて
治を見きくし虚(きよ)寒(かん)の症(しやう)を見んとて
みづから仲景(ちうけい)の方法をたのむとも
みだりに之を仲景の書に随ひ
と浮剤も寒剤も用ひて温補す
かくつきハせず虚実の症に合ばハ

さればこそ手掘もはやく華が病人に
虚実の考でわかちて中にも世の
一流の療治に申もすくなし腎に
眼をつけて六味丸八味丸八物湯大
補湯滋陰の剤補ひたし是ありそ
れ前後補の方にいたづらにほいさ
死をも温補れ氣薬はそあまくとも

際乃よいの安らかくなり来て
療治の風も一流とかはりて補瀉
漢も年々変わりてむかしのよろ
存たまり
○一流あり温剤寒剤をとりて
おきてよくしむかしな療治をせ
らうに鋭痰邪熱をかかる老年は

ゆきへ引かけて儀もあやまちありて附
の病人又ハ虚成扶まぬハなし
あきまよきりく世上の医者皆並
所術まことともせ考なりに
参耆桂附姜乃薬を用ひて病却
くおそくなれて参附がたしぬ
よろく保参用ひくまする大切

乃病よ可敷処へ治源義ある医
老をしか外かろき薬を用ひく
見ずいしむにあをさし寂にて
人にすと名をあがしられども
医者ありよ手にて病成をます
といふもあるまてハあり世の中ん
医者よりなまい病よ参附をとめし

或人此医者乃手際の深案にて
まござりてさへすれバなりかねとハ医
者の仕そこなふひと此流れ多くせと
二ツより合て手柄をせんとする事
まに此の療治にて深くんハ此病症
奇難熱も此にていふし　答て曰
先にハ此婦温湯に偏なれバ言葉

瀉剤に偏奇なくいふまもなくむく
る事バ仕うくこそれども世上をさる
ようなくてむくく為偽義ハ医
者名てるく養向きバその多し
あまりかなきバ名理にや　答曰
是ハ人此志して子細きうせ
凡病人十人ハ内九人志がこなし

一人は大きに手柄ありしハ九人の
恙なんじハ帰りてさきて是く拙者の
者ら強九人共志なんじハ師匠(たいとう)
病状もこむきなる療治甚く
死病にすかさ此のわ所付なんじ
あれども気まで業ありいさんじ
となふゐにふけく縁にく一夜人は

向すかき此医理之をそて論しむ
すすめしかや能く考ふべし
同じく曰吐剤をもる剤なきこのむ家業
強く傷寒(しやうかん)時疫(じえき)の療治をよく
そくという此法けり来まや
答へて曰傷寒と以疫病ハむつかし
きこえぬふかくとも乃世に能合点したる

人ハ一人もなしと承るそれゆへ大抵
世の通例なる療治傷寒時疫の初
発の節ハ大かた似よりよきたりなれ
事にくちかともつうしくなき表へも
おちざるやうまたあれと小柴胡
湯或ハ益気湯八解散の加味なぐく
にくみのるけハぬきずままにても

うけとらざるハ家の医者がさばかれハ
たゞち其医者ある殺したるとも
見くも孫ハ如何なれどもいひかけハなら
ぬ然ゝ擲十人の内ニ一人ハかくさ
せられなるの手へ引うけ外の医
者ひろくくせのあるなどをよんごとく
先よき療治をすれハゆへ世上さわ

はなもはなほどの大きなる手柄
なかにも九人迄仕そんじ一人は
げど是非なくは次まけのならず
一人の手柄はなかなかに目出度し
あれ事なれども是に十九人は
仕そんじてもふしぎのならのし
柄ぞかくさるるなる医者の發

いの旅ハ目くるうちに獨参湯
参附湯乃大剤を用ひなば正気
勝附は邪気ひとりおさまり十
人に三人は快気をえらるもいれども
平素元気つよき療治といふものゝ
十人ハ七人は跡へと先へつてもうぶき
乃こきぬやうにするは然不へり乃

家々薬浮創なとさる流義は醫者
の手へ引うけ白虎湯承氣湯抔の類
用捨もなくそこらに投ること多く
見えすなる手柄もあれど已傷寒を
仕覚たる者ハよいけれど此手へ
来ある病をも不知は其志なり
又時の傷寒多くハ労瘵の傷寒

多し此流は療治にて助かるハすくなく
死ぬるハ多し 四五日目になれハ人参を
もとの手へ引うけたる薬をとりぬ
觸のおとりハいつもより下ほとろや
答らく日いつまでもかけたりしれぬもの
むかうへ荊へハ株のおもむき之
○一條あり卒病に薬ハ用ひへ去處

よい薬ぞ用ゆれバ和ぐなりさと
いひて灸さゝせより薬喰湯治の支
当世医とすれちがふてはゐるをせう
そうなり様に仲景んおおいふてやす
仲景が書に長病の医薬菜剤術
医志は為し然や仲景以後今に至て
長病小案なりといふ人一人もなし

此流のいぶんなれバ仲景がはじめ至
漢が医志皆に律するといふもおる
之名手有能医皆下手ばかりも有ば
すじ薬がきゝめにくゝも一向教誨じは少も
んねでこさいひふ之日本意医書を委く
出さずあらす不学なるも在之は流義之
きりおろし世界に一向声聞ぬ薬だのことを

すなはち医者は、こゝろもたしかならバさき同じ海
しかるを今の流儀二風ありて面
白き處あれをはなりやくたいてか
いはの評判にかゝるやうにあらず
元医流さへなく流派ありかき
流派といふこともあれ流派をもつて
節症をまけおぼえおもひ入れ

遠は氣元を付らるべし
おこゝろ急いおぼへこゝし第一
世の人医者をいふもれいはなき
下り病人にあたれ附汁用にてい
るのと相の常にいらざらむげ
匹とし是文字のみ気書遠ちり
手あなは病人のあれしきこそ

それはたゞよく医者せん
善悪を見分るによるべし
平生病人の多き時医者は
志たしく多く出会ものなれ
ども其道に心かけ会得ぬべき
おのづから善なるべきこと
ん此出会甚く人の上手なりける下手ある世

たゞ見てもよし然るに又
諸流義にあてがひくいづれ
なりともえ定め手本なる病人を
時々を待ちぬ故は平生見ん心
がけ肝要也

病家懇作心得の事

一 世ある儒医といへる儒学もなく

詩文の類ハ申すに及ばず軍書迄も
んよく存ぜられ候上ハ家業の
医学ハ殊更くハしかるべしと見
極れども却て医学ハ外[illegible]す
より不足なるを補ひし医学者あ
侍ることを識んとて外の学問
うハさをやめて只医書の事を大

つねに医書をよみて能く修行候
故なり
一醫者よんじてよきことあしきこと
所の志あるも於療治の務くハんだて
よきことゝても下手なるハ益なき
ますくハしくておぼしめしとても療治
さへよくしらバそれ月ねであるべし

あながちんだくはかなふ。つよにほう
どさかるゝ極て意地まろく
くはすなほれ心ずてあし然医者ハ
害なれはあれく
一短気なる医者あり柔和なる
医者あり短気を柔和とこて
短人ともおほく夾はい短気ともあし

柔和を本とし皆〳〵の風俗のよろし
き事也物事丁寧に念比に致し給
も末で鼻おもはれみも皆
こと致へよろしかるべし所にてあるべし
べきはあるべし
一慈悲ある医者といふものは
人の身おもひのそとらるへきを

一平生物ごとに丁寧にて療治あり
藥なども医者ありて平生嗜さ
せる外藥なども療治は丁
寧なる医者をゑらむべし
一雖も出入の者小商人の類也
医者は私するもの多くいよろし
からず甚子細にして医者をゑらむ

者なれど病は兼禁あしきをも
ききまたよい薬はまされども
来ぬるかなる所者医者の善悪を
志るべからず一文明一事のなきけ
有がたされ佛神の御ふいなも
乃比丘尼にもたくの数替られ
るなり

一肉經女中方ゟくよりえてや夢
医者ハ心をは手指察すべきなく
気並婦人下〻のいハ婦にくき拙
なり婦女病の事ハ繕くき
さ内くとお話りに家まで・と心ぬ
よ経也さ念り醫者をよくと手ハ入
れるひ法りおしぬハ志ななてすと時

世上ハ以テレンのと手と見ゆ書お
の醫術もく皆ま之夜根のすい
あさとぬし手お乃医術法く記
折人いろくと人ハおもひつかぬし
屋ふハすかぬ千風俗の医者大
方療治下手あかくぬ之
一不学ふ器量の医者療治の上はくは

もせうのすはべくも家人にも決断なき
様なるは何のもちひもなく医師を
いそがしくたのむべきの事にすぐれたる
医人をむかへとおもへしふさにこゝろ
をくばるべし
一病家より医者をたのむべく遠
慮は不審なる家のあるべき事子細は

病者去人乃ち療をおもんじて
いのちを延す医者の家来同前に
今人の受配をするは若き人ぞおや
かくごあるにも病人あれば時々
ほかの薬領をもらふべきも
論なれ共いかにもよくおもひわけ
なしにて医者をたのむ事也

如何ぞや楽屋にて見物をすれば
はよき手据へすくなき仕様は多
しと見へし
一 寺へお入出家を常に貪借
なども少い人参を施しけるより
是物を送る事は是非をも手ないにて
はよらぬ事の願し

一 病家は治を多く持て大抵れ
病まなくは療治をきくく余所にて
もあらしきにゆゑ大医者かゑ
疎れなど匙をひさぐ卿は医者よ
薬礼をあてに自分も毎日見舞
は風は医者押立手柄となれど
一 代仕様じもなき事は之能き病

然にも此医者ハ今なを伝ふると
まづくハ聞もしねども只功者なる医
者と用ひもちゐしかれバよしそれ也よ
なじみもかくさなりまれ家とある所
此者の病家多くありて療治
数ハ大医よりおほし者これをおほよ
能をおぼへて病ハ初発と中比と

終との三段ありて此医者を致すべくなれ
一度も医者よりして一等下手なる
医者大家へ出入をしけるに病人あ
まで医者の診後おもふと必夜伽(よとぎ)
医者能あしきハ家来療治
病家の亭主定めずに打かけ続ける
出来てよく打ちうちて終に医者を急

婦人は仕へくバ自分のいひことを好
不好ありとも都てだや帰にあらず
行ハ無くんば届し
一、本道ハ外科とも科へ手絶し
外科針医とも本道と継ぐ無く
取持ちする医者を求て婦付外科
外医代のひぶんを行ふがちにハ経

男を見うしきを
四く曰太く像くのあとくあれハ
医術取て婦附雑代お技をくぐるゝと
すしめ付をつかや　若く四おに
婦でく医術を求て婦ハ年生れ
んがけよあり病人行わく候よ
医者とを求て婦ハ年をみえく失と

さぐといふもの常に脉する時
見合せ学問もなく器量も
何の医者と見うけたらバ素人
にも出合其医者の上手下手を
見届医者つかられ評判よく
為になくもあり随分医者ずきと
いふ者なるがよし能所に医者出合を

多く志ても医者定めぬよ
あらゆる藝能に付ての茶湯
盤上諸稽古のにていろいろ医者
と出合といふとも何の中に
たくさんくの其医者まで手
下手を見分為よ志たしく
可く平生左様のかげもなき

病は早く医者をえらびて大切
にせよ不乃果てと後悔をすべけれ
一門親類寄りあいの中にても
学問もいたしかんだくおとなしきを
我慢も清浄もなき人と後をまかせ
一 病人ある家財費をかまふべからず
徒いえと無い給なさるれやくさへ

造作をするものは金銀ばかりで用いのは
杉しるしば益なき事に費をござらい
平生のことなり病人ある時はとりくせん
なきことにて費ある所もなし右様
合点なく諍乃費をいとい殺害
となりにもあらく
一 看病人夜伽功者成る大切の事

食する事で人参すくれらつにをよバ
ぬ事なれ共名の外大気にもそまつ
なる事なり能々心得べし
一人参の事悪敷人参多く用ん
よりハ好人参少て用る当世医者ハ人
参不目利なる故か又目利ある故か下
上人参を以つかふもよき下人参二朱

依て人参のよき所はよからじと
人皆目をおどろかし上手なれバ
見立んたまあしき人参をも多く
つかふ仕方なりけん歟愚かなし
一病人ある時分此方に遠ざくべく
からまた医者へ馳走なといふてすゝ
よろしかるべく其事に付くまで

諸手に縁病人はおこたりもなく
まゝに医者を抑てしいまゝにする
もあし薬所へかね書抱に合はまゝす
ずし又古人は遠慮をかりまい
様子にはよくもはかりてつかはれ
一病人同意よりおもひ果てぬ時
或も医者の薬をわかりいなかり

不用しくひそかに外科医者の薬を
用ゐけり甚は辟事なし病人のために
あしからず外の薬は用度おもひではり
ていよ頭をいひ前に医者をとりかへて
可又おもひしらぬ時は外の医者に
療治は施むていやともいはぬを
のよかり善医者を邪心乃はらしひ

何かくらはしかばつくいか程よからんと
多くくふて害を損じたる事多し
一病中病後食する事を慎しく然れ
みだりを達者も志ある事を重
いへとも初心なるあればつきすへし
先病中病後ハ食する此禁物多
きしく料理の仕方すくなきもし

のく医者ハ禁好物にいふりなれども
料理方仕方まて不案内なれバ其己絶
料理人ハ仕法いよいよ乱れ禁好物を
志らずかへりて不まんを生ずべし
又医者乃好物ハ自然をせうし不好
物此者を大事に禁をも渡こと
あはまし程するなれどもあまく何ば

すべて色欲いましめて食ふよろしかれと
いへども色ごのみなる病はあるなれ
なりおもくならば青病人まことになく
他のをとげとく婦人を遠ざくべし
傷寒(しやうかん)痢病(りびやう)労咳(らうがい)中風此四つハ
大病なれ常にはやくみて良医を

一 ゆるだけといへど久しく病あるを
こそあげらい病根を去して
ものをととのへず用心をよくして
一 傷寒ハ邪(じや)なり風寒暑(しよ)湿(しつ)を
避(さく)べし雑とも志ず不行しなす
労病の時ハ此薬を是ありなれ
なりそれより不精の体をたのむべき

或ハ産ですゑ後心得法甚しく外邪
におかされ瘧患ふ事まゝあるべしお風ハさ
まで附あなどらば療治をとるべし
外の事後ハ傷寒をしらず医者
附もの最てあるなれど病と
くくもかゝりきまなと
一 痢病ハ初程より附時はくもとて

ましに食書生さへよけれバ病もなよ
ぐハなし
一 中風ハ士ハ立身に心をつくされ町人
百姓ハ金銀を急にかせぐゆゑ甚しく
嫉みのをこるとぞ此二ツの病根なり
一 労咳ハ咳気の療治に住ずかひと
気鬱と身よふまゆうせぬと損ずると

此ゆゑより生ずるところなりし其
外一切の病根平生んのびつきすと
いふをおそくいふ迷ぐるし然して
名医達に取合て懐生の書一冊を
出まんとす此希ものや

正徳三年巳三月

松韵堂弄蔵

大